

アルミ缶 リサイクル ニュース

July
7
2016

Vol. 136

CAN
to
CAN



アルミ缶リサイクル協会

Japan Aluminium Can Recycling Association

東京都中央区銀座4-2-15 塚本素山ビル6階

Tel.03-6228-7764 Fax.03-6228-7769 〒104-0061

<http://www.alumi-can.or.jp>

第203回理事会・第44回定時総会開催 ～2016年度事業活動計画等承認される～



第203回理事会及び第44回定時総会 会場
中央左：遠藤政宏理事長、中央右：富永泰夫副理事長

当協会は、6月17日(金曜日)に第203回理事会及び第44回定時総会を開催し、2016年度の事業活動計画、収支予算等が承認されました。その後に記者会見を行い、2015年度の飲料用アルミ缶リサイクル率(再生利用率)、2015年度の飲料用アルミ缶リデュース率及び2016年度事業活動計画を発表しました。

記者会見には、30名を越えるアルミ業界関係、環境関係の報道関係者が参加され、遠藤理事長、富永副理事長、保谷企画委員長および事務局より以下の内容を説明しました。



記者会見 中央：遠藤政宏理事長、
左：富永泰夫副理事長、右：保谷企画委員長

2015年(平成27年)からアルミ缶の輸出に占めるU B C量が輸出通関統計量として把握できるようになり、今後は再生利用率にこれを含めてリサイクル率を算出するにします。これによりアルミ缶リサイクル率は90.1%になり、目標の90%を達成しました。従来の定義(国内循環量でのリサイクル率)では、77.1%となり前年の87.4%に

リサイクル90.1%
Can to Can 74.7%



比べて、103ポイント低下しました。2015年々初よりアルミ地金価格が大幅に低下したためU B C価格も低下し、U B Cの流通が市況の動きに大きく影響されたこと、粗鋼生産量の低下・自動車生産台数の低下によりU B Cの使用量が減少したこと、コーヒー缶の多種類にアルミ缶が採用されアルミ缶の消費量が増加しましたがまだ回収されるま

リデュース率 7.8%削減

2015年(平成27年)に出荷された国産アルミ缶1缶当たりの平均重量は15.61gで基準2004年に対し7.8%削減されました。上方修正した目標値(4.5%)を2年連続で達成できました。

飲料用アルミ缶 リデュース(軽量化)実績

	2004年		2015年	
	基準年	削減量 [g]	削減率 [%]	
① 缶仕様の改善による削減	—	-0.38	-2.2	
② 缶サイズの小型化による削減	—	-0.94	-5.6	
合計	—	-1.32	-7.8	
1缶当たり缶重量 [g/缶]	16.93		15.61	



で至っていないこと、などが原因と考えられます。一方、CAN to CAN率は74.7%となり、前年の63.4%を11.3ポイント上回りました。協会としては、資源の国内循環をリサイクルの基本としていますが、アルミ缶の国内回収ルートを支援し、アルミ缶が持続的に循環される環境づくりに努めていきたいと考えています。

2016年度事業活動計画



遠藤政宏理事長
昭和アルミニウム缶(株)
代表取締役社長

1:概要

平成27年(2015年)の飲料用アルミ缶の需要量は、対前年20億缶余の記録的な増加となり220億缶の大台に乗った。使用済みアルミ缶(以下、UBC)は、通関統計品目となり平成27年(2015年)は年間4万ト余の輸出が明らかになった。市中相場や為替の影響で変動はあるもののUBCの相当量が海外(特に韓国)で継続的に資源循環される状況にあることから、今年度からリサイクル率は従来の国内再生利用量に輸出統計量を加算した数値で算出する。

アルミ缶のリサイクルは集団回収ルートを筆頭に自治体収集ルートは堅調に推移し、スーパーなどの店頭回収は健闘していることが平成26年(2014年)アルミ缶再生利用フローから窺える。集団回収は、障がい者施設、自治会、老人クラブ、学校などと回収拠点や市町村が連携、協力して地域ぐるみで活動を支えている。本年も学校表彰、回収協力者表彰などを通して

回収活動を支援していく。また、自治体、回収拠点、学校などに3Rの啓発、情報提供を継続する。

平成27年(2015年)のアルミ缶リデュースは、小型サイズ缶の急増で1缶の平均重量が対基準年7.8%の軽量化となった。環境配慮の容器設計が求められる動きがあるなか、穏やかな軽量化が進むとして次期自主行動計画の目標値を設定した。

3R推進団体連絡会としての活動は、自主行動計画のフォローアップなど共同の取り組みを継続し、関係主体との連携、協働をはかる。容器包装リサイクル法の見直し論議が終わり、本年は消費者調査を実施し課題を整理する。

2:基本方針

「アルミ缶における3R推進のための第三次自主行動計画」の達成に向け、以下の方針に沿って取り組む。

- (1) 安定的にリサイクル率90%以上を維持する。
- (2) 平成32年(2020年)までに1缶あたりの平均重量を平成16年(2004年)実績比で10%軽量化する。
- (3) 3R推進団体連絡会の一員として、積極的に3R推進に取り組む。

3・平成28年度(2016年度)事業活動計画の内容

(1)リサイクルの推進

目標:安定的にリサイクル率90%以上を維持する。

(2)リデュースの推進

目標:平成32年(2020年)までに1缶当たりの平均重量を平成16年(2004年)実績比で10%軽量化する。

(3)3R推進のための活動

(1)各回収ルートの関係者との連携、協働の推進
UBCの市中からの回収は少子化、高齢化、地方の過疎化などによりその回収ルートは類型化しつつある。

①自治体への広報活動に努め、UBCの国内循環や集団回収への取り組みを支援する。

②回収拠点と連携して集団回収に取組む団体の掘り起し、集団回収の促進を支援する。

(2)広報・啓発活動の推進

情報のアップデートに努め、回収活動への理解を深めてもらえるよう図る。

①次世代への環境教育と消費者への啓発活動

②マスコミ関係者への広報活動の継続

③調査活動その他
「アルミ缶リサイクル率」(「Can to Can率」含む)、「アルミ缶リデュース率」を調査する。

④アルミ缶のリサイクル再生利用フローの調査についてデータの精度向上に努める。

③(社)日本アルミニウム協会等と連携し、「アルミニウムと健康」について医学情報の収集と発信を図る。

④(社)日本アルミニウム協会等と連携し、イベント用アルミ缶を企画・制作しアルミ缶リサイクルの啓発を図る。

(4)3R推進団体連絡会メンバーとしての活動3R推進のために事業者は消費者、自治体との「主体間の連携」を進めることが肝要との認識に基づき、同連絡会を構成する八団体が共同で開催する各種取組みに参画する。

①第二次自主行動計画の進捗状況を公表する(12月)。第三次自主行動計画を策定し、公表する(6月)。

②容器包装リサイクル法の見直しに際し各団体と連携し、省庁に対する確かな対応を行う(4月パブリックコメント)。

③3R推進フォーラム、3R交流セミナー意見交換会(4場所)を開催し市民、行政との意思疎通を図る。

④市民リーダー育成のための支援、リサイクル冊子の制作・配布を行う。

⑤エコプロダクツ展等の展示会に出席する。

(5)当協会ワーキンググループ(WG)の活動
広報WG、3R推進WG、リサイクルフロー調査WGによる効率的・効果的な広報活動の推進、自主行動計画のフォローアップ、リサイクル

率向上のための施策検討を図る。

2015年度の役員

理事長

遠藤 政宏
昭和アルミニウム缶(株)
代表取締役社長

副理事長

富永 泰夫
ユニバーサル製缶(株)
代表取締役社長

小林 淳(新任)
大和製罐(株)
取締役技術部長

森 泰治
東洋製罐(株)
執行役員 環境・品質保
証本部本部長

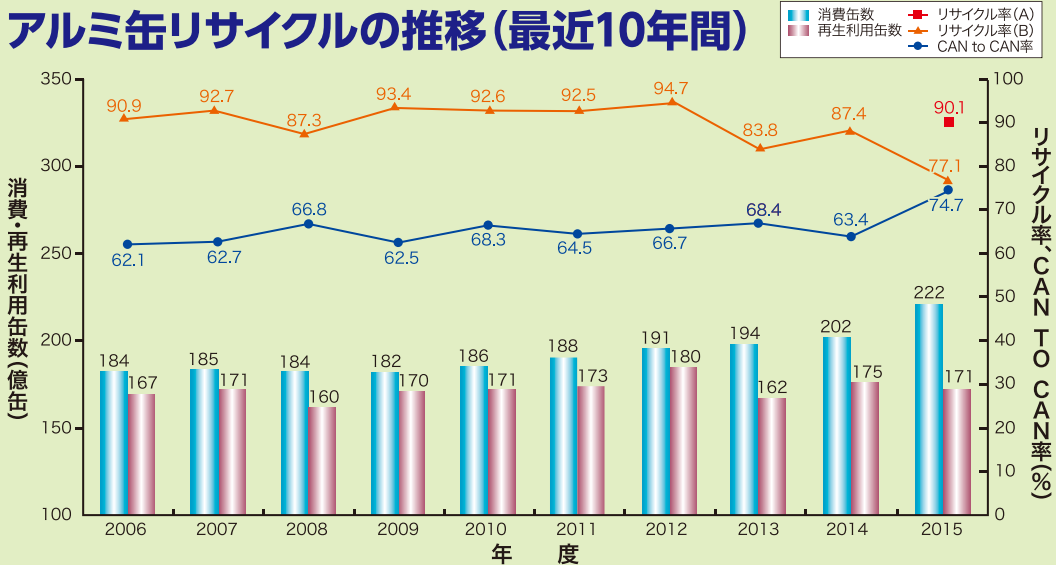
坂田 清司
日本軽金属(株)
執行役員 板事業部長

谷田部 崇(新任)
三菱アルミニウム(株)
執行役員
圧延事業本部副本部長

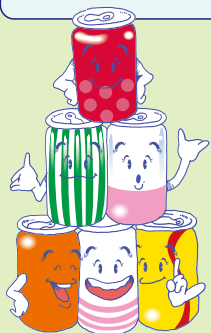
事務局専務理事

森口 夏樹
(宇田川 寛二の任期満了による)
森口氏は、昭和アルミニウム缶(株)から出向。

アルミ缶リサイクルの推移(最近10年間)



アルミくずの輸出に占めるUBC量が2015年から輸出通関統計量として把握できるようになり、国内で回収されたアルミ缶UBC全体(輸出量を含む)により算出するリサイクル率(A)を今後「正」とします。
従来のリサイクル率の定義(B)についてもフォローしていきます。



注) 1. リサイクル率は、国内で消費されたアルミ缶のうち、国内で回収されたアルミ缶くず全体の再生利用量(輸出分を含む)の割合(A)です。従来は、国内での再生利用量の割合(B)でしたが、輸出量が通関統計量として把握できるようになり、今後は(A)をリサイクル率とします。

$$\text{リサイクル率(A)} = \frac{\text{再生利用重量(国内で再生利用されたUBC+輸出されたUBC)}}{\text{消費重量}}$$

$$\text{リサイクル率(B)} = \frac{\text{再生利用重量(国内で再生利用されたUBC)}}{\text{消費重量}} \quad \text{:従来のリサイクル率の定義}$$

2. Can to Can率は、再生利用されたアルミ缶くずのうち、再びアルミ缶として生産された割合です。

来協訪問学習

毎年、春の修学旅行シーズンに中学生が当協会にアルミ缶のリサイクルについて学習するために訪問されます。

5月25日に三重県いなべ市立藤原中学校、26日に岐阜県関市立旭ヶ丘中学校、静岡県小山町立尾山中学校、および岐阜県恵那市立明智中学校の4校を受け入れました。

アルミ缶リサイクルの効果、工程、現状などについて説明し、熱心に聞いていただき、質疑に対応しました。

一部の学校からお礼の手紙をいただきました。



学習風景



「2016年度アルミ缶回収優秀校表彰」の応募開始

当協会では、循環型社会形成に向けて積極的にアルミ缶回収活動を推進してありますが、その一環として、長年に亘り標記の表彰を行ってきました。

応募対象は、回収活動歴が3年を超えて、アルミ缶の回収に取り組み、顕著な実績を上げている小・中学校です。

原則、アルミ缶の引取り先(回収業者、回収拠点)から推薦いただく形式を取っていますが、学校の自薦による応募も受け付けています。アルミ缶の回収に積極的に取り組まれている学校は奮って応募して下さい。なお、幼稚園は、今回の応募対象ではありません。9月以降に募集する一般の部に応募してください。

応募方法は、ホームページをご覧ください。

<http://www.alumi-can.or.jp>

応募締め切り

7月29日(金)必着



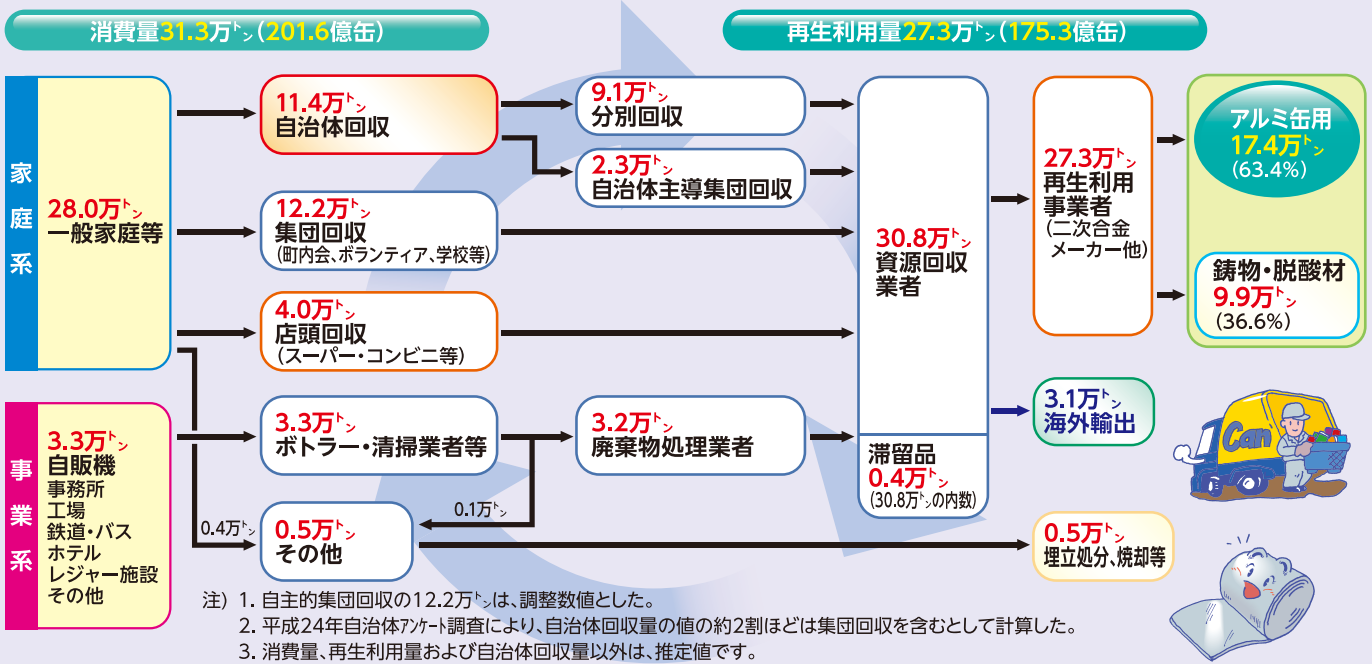
参考▶ 世界各国のアルミ缶リサイクル率 (平成28年5月末日更新)

国名	需要量(億缶)				リサイクル率(%) リサイクル率の算出方法は各国で異なる			
	2011年	2012年	2013年	2014年	2011年	2012年	2013年	2014年
イギリス*1	94	94	96	98	60	65	65	
イタリア*1	19	21	23	22	60	67	72	
フランス*1	41	43	47	51	55	57	64	
ドイツ*1	32	34	33	36	96	96	99	
スペイン*1	66	65	62	63	63	65	66	
ノルウェー*1			4	5	94	96	95	
アメリカ*2	925	922	940	933	65.1	67	66.7	
ブラジル*3		198		229	98.3	97.9		98.4
韓国*4	34				80			
日本	188	191	194	202	92.5	94.7	83.8	87.4

*1 需要量:BCM (Beverage Can Makers Europe)の年次報告書によるリサイクル率:EAA (European Aluminium)のプレスリリースによる
 *2 需要量:CMI (The Can Manufacturers Institute)の年次報告によるリサイクル率:AA (The Aluminum Association)のレポートによる
 *3 ABAL (The Brazilian Aluminum Association)のプレスリリースによる
 *4 韓国金属缶資源協会のホームページより抜粋

平成26年度アルミ缶再生利用フロー

平成26年度のアルミ缶消費重量は312,953トﾝ、再生利用重量は273,491トﾝであり、リサイクル率は87.4%



協会からのお願い

● 切り取ったタブだけの回収はおやめください

アルミ缶はアルミ缶を丸ごとリサイクルした方が安全で効率的です。タブだけを収集した場合、コンベアからこぼれ落ちたりするのでリサイクルの工程で、特別な管理をしなければならないことも理由のひとつです。

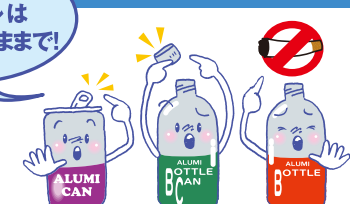
● ボトル缶のキャップの取り扱いについて

飲料用アルミボトル缶のキャップは、アルミ製です。キャップも貴重なアルミ資源です。キャップを本体から外し、キャップ、本体とも軽く水洗いした後、中の水分をよく切った上、本体と一緒に回収袋に入れてください。

● たばこの吸いがらをいれないで!

アルミ缶に、たばこをいれたままリサイクルすると火災のおそれがありとても危険です。

アルミ缶のリサイクルはタブをつけたままで!



編集後記

あつという間に夏本番がやってきた感じです。着任から一年が過ぎ、今度は専務理事が交代しました。昨年は地金価格が大幅に低下し、改めてアルミは市況により売買されているものと痛感しました。リサイクル率は短期では変動が大きく、少し長い目で見ていく必要があります。熱中症に注意しましょう。

アルミ缶リサイクルニュース第136号

発行日 平成28年7月20日
 発行人 森口 夏樹
 編集人 大西 輝彦
 発行所 アルミ缶リサイクル協会